

家の中

朝の支度をする加瀬

イヤホンをつけてズックにロックを聴く加瀬

玄関のドアを閉める

電車内

向かいに座るカップルを睨む加瀬

大学の最寄駅に到着する電車

駅から道

電車から降りる加瀬

階段を登り改札を出る加瀬

大学へ歩きながらカップルを睨む加瀬

加瀬の日記  
(僕は孤独だ。でも、学校に行けば、先輩と会える。それだけが唯一の救いだ。多分)

大学

大学へ入る加瀬

「あ、亮介くん」

「あー先輩、こんにちは。先輩はこの後授業ですか？」

「うん、そうだよ。亮介くんも？」

「はい。もうめんどくさいです」

「だよね」

「先輩今日お昼どうしますか？」

「まあ今日は学食でいいかな」

「あ、ほんとですか。じゃあ〜限終わったら一緒に行かないですか？」

「あ、いいね。いいよ。だったらどっか他のとこがいいかもね」

「ですね。どこにします？」

「んーどうしよう。どこでもいいかな」

「あーそうですか。そしたら、えっとちょっと待ってくださいね」

「うん」

「このことかどうですか？この間テレビでやってて行きたいなって思ってたんですけど」

「あーここのいいね。ラヴィットでしょ？」

「そうです、そうです。見取り図のあのやつでみて」

「亮介くんもラヴィット観てるの？」

深山

加瀬

深山

加瀬

深山

加瀬

深山

加瀬

深山

加瀬

深山

加瀬

深山

加瀬

深山

加瀬

深山

加瀬

加瀬 「見てますよ。家出る前とか」  
深山 「面白いよね」  
加瀬 「はい、本当に好きです」  
深山 「ね。私も」  
加瀬 「何曜日が一番好きですか？」  
深山 「んー、難しいね」  
加瀬 「ですよ。全曜日面白いですし」  
深山 「本当そうなんだよね。んーまあでも、木曜かな。ニューヨーク好きだし」

加瀬 「えーそうなんですか。面白いですよ」  
深山 「うん。もう本当に面白い。亮介くんも好き？」  
加瀬 「はい。YouTubeとかも結構見ってます」  
深山 「あーほんと。本当に面白いよね。ラジオとか」  
加瀬 「あーラジオ好きです。なんか素の感じがいいですよ」  
深山 「だよ。あの感じも好き」  
加瀬 「じゃあお昼はここでいいですかね？」  
深山 「うん、そうだね。そうしよう」  
加瀬 「終わったらここに集合します？」  
深山 「うん、そうだね。」  
加瀬 「じゃあまたその時」  
深山 「うん、また後だね」  
加瀬 「はい」

それぞれ別の方向へ歩いて行く二人

#### 講義を受ける加瀬

#### 加瀬の日記

(5月10日。誰であれそうだと思う。僕も例に漏れず、講義はいつも退屈だと思っている。もちろん今日も。もう一年はこの大学に通っているが、楽しい、とか、面白い、とか、そういう、何というか前向きな感情を抱いたことは、ただの一度も無い。だから、できることならこんな場所へは来たくない。毎日休みたい。何かほかのことをしたい。それでも、毎日学校へ通ってられるのは、行けば先輩に会えるからだ。僕の大学生活は、先輩でもっているようなものだ)

#### 先輩と集合する加瀬

#### 深山

「あ、亮介君。ごめんね。ちょっと遅くなっちゃった」

加瀬  
加瀬の日記

「いえ、全然大丈夫ですよ。行きましょう」  
(そのあとは先輩と一緒にお昼を食べた。前々から計画してたことで、やっと実現できたのは素直に嬉しい)

食事するお店

向かい合って昼食をとる二人

加瀬 「そういえば先輩って、彼氏とかいますか？」  
深山 「彼氏ね、今いないの。最近忙しいしね」  
加瀬 「あーやつぱさそうですか。余裕ない感じですか？」  
深山 「うん、そうだね」  
加瀬 「それおいしいですか？」  
深山 「うん。もしかしたら今まで食べた中で一番かも」  
加瀬 「そんなですか」  
深山 「それはどう？」  
加瀬 「これもすごいおいしいですよ。今まで食べた中で一番かもしれないです」  
深山 「あー」

笑う二人

深山 「一口ちょうだいよ」  
加瀬 「これですか？」  
深山 「うん。だめ？」  
加瀬 「え、いいですよ」  
深山 「やったー」

加瀬のおかずをとって食べる深山

深山 「ほんとだ。おいしいね」  
加瀬 「ですよね」  
深山 「うん。私のも食べる？」  
加瀬 「いいんですか？」  
深山 「いいよ。私も一口もらっただし」  
加瀬 「じゃあ、いただきます」  
深山 「どうぞ」

深山のおかずをとって食べる加瀬

加瀬 「あ、ほんとだ。これもおいしいですね」  
深山 「でしょ」  
加瀬 「はい。どっちが好きですか？」  
深山 「んん、どっちもおいしいからなー。でも、こっちの方が好きかな」

加瀬  
深山

自分のを指さして言う深山  
「こっちも凄いいいすもんね」  
「うん」

加瀬のバイト先の映画館  
接客をする加瀬

加瀬の日記

(バイトは週に三日、火曜と木曜と土曜にそれぞれ三時間、三時間、六時間、という感じで働いている。もう働き始めて二年になる。まあ、ただこなしているだけだ)

バイトを終え、休憩している加瀬  
そこに来る中田

中田  
加瀬  
中田  
加瀬  
中田  
加瀬  
中田  
加瀬  
中田  
加瀬  
中田  
加瀬  
中田  
加瀬  
中田

「あ、亮介君。おつかれ」  
「おつかれ」  
「どうなの？あれから」  
「いい感じだよ。今日も一緒にお昼食べに行っだし」  
「えーほんと。凄いいじゃん」  
「まあね。あ、そうだ、ありがとね。色々。役立った」  
「でしょ」  
「またなんかあったらアドバイス求めるかも」  
「えー、また？」  
「おねがい」  
「まあじゃあわかった、いいよ」  
「やった、ありがと。じゃあ行くね」  
「うん、また今度」

家

加瀬のライン

スマホを片手に悩む加瀬  
(今日ありがとございました！楽しかったです！)

スマホを眺める加瀬

スマホのバイブ音が鳴り、駆けつける加瀬

ツイッターの通知で落胆する加瀬

深山のライン  
加瀬のライン  
深山のライン  
加瀬のライン

スマホのバイブ音が鳴り、スマホを持ちあげ、見る加瀬  
(こちらこそありがと！私も楽しかった！)  
(よかったです！また行きましよう！)  
(うん、そうしよう！)  
(嬉しいです！)

加瀬のライン  
(よかったら今度電話とかしませんか?)

深山のライン  
(いいよ!いつする?)

加瀬のライン  
(明日とかどうですか?僕その日バイトないので)

深山のライン  
(あーごめん、明日は私がバイト入っちゃってる・・・金曜とかどうかな?)

加瀬のライン  
(金曜なら大丈夫ですよ!その日にします?)

深山のライン  
(うん、その日にしよう!)

加瀬のライン  
(時間とかどうします?九時ぐらいはどうですか?)

深山のライン  
(うん!いいよ!)

加瀬のライン  
(じゃあそうしましょう!)

深山のライン  
(うん!)

深山にラインを送る加瀬

加瀬の日記  
(それから今日は先輩と電話をする約束を取り付けた。着々と歩を進めている感じがする)

日記を書く加瀬

加瀬の日記  
(このまま焦らずにゆっくりといかないと。こんなこと滅多にないんだから)

バイト先の映画館

休憩中の中田に深山とのラインを見せる加瀬

加瀬  
「どう?この感じ。めちゃくちゃよくない?」

中田  
「ちよっと貸して」

加瀬  
「うん」

スマホを中田に貸す加瀬

中田  
「うん。結構いい感じだと思う」

加瀬  
「おーやった」

中田  
「電話もするんだ」

加瀬  
「そう。ほんとに嬉しいよ」

中田  
「うん、嬉しそう」

加瀬  
「あ、出てる?」

中田  
「もう凄い出てる」

加瀬  
「うわーなんか恥ずかしいね。このまま付き合えたりするかな?」

中田  
「ああどうだろう。でも結構脈ありな感じするよ」

加瀬  
「おおやった。いやなんか、凄い楽しい」

中田  
「楽しそうだね」

加瀬 「楽しいよそりゃ。ずっと楽しい」

微笑む中田

中田 「いいね。うらやましい」

加瀬 「そう？」

中田 「うん。私何にも無いもん」

加瀬 「あれ、でも前何か言ってたなかった？」

中田 「あれダメだった」

加瀬 「ああそうか」

中田 「だからうらやましいよ、ほんと」

加瀬 「いや、ほんと、初めての彼女だよ」

中田 「まだ油断しちゃダメだよ」

加瀬 「そうだね。これからちゃんとしないとね」

中田 「そうだよ。変にへましないようにね」

加瀬 「うん。頑張る」

中田 「頑張って。応援してるよ」

加瀬 「ありがとう」

家の中

電話をする加瀬

加瀬 「先輩って今好きな人とかいるんですか？」

深山 「今かあ。いないな、多分」

加瀬 「多分ですか？」

深山 「うん」

加瀬 「えーなんか、ちょっと気になる人がいるとかですか？」

深山 「んーそんな感じかな？」

加瀬 「バイト先の人とかですか？」

深山 「ううん。同じ大学の人」

加瀬 「えー、じゃあ会ったことあるかもしれないですね」

深山 「うん。でも多分知ってる人だよ」

加瀬 「え、ほんとですか。相当限られますね」

深山 「うん、多分そうかも。亮介君は？」

加瀬 「気になる人ですか？」

深山 「うん。とか、好きな人とか」

加瀬 「えー、でもいますよ。好きな人」

深山 「そうなんだ。私知ってる人？」

加瀬 「んー、まあ、はい。凄くよく知ってる人だと思います」

深山 「えー誰だろう。気になるな」  
加瀬 「あ、ほんとですか」  
深山 「うん、凄い気になる」  
加瀬 「なんか照れちゃいますね」  
深山 「ね。教えてよ」  
加瀬 「えーダメですよ。それこそほんと恥ずかしいです」  
深山 「ダメかー。知りたかったな」  
加瀬 「じゃあいつか教えますよ」  
深山 「えーいつかか。じゃあ楽しみにしとくね」  
加瀬 「はい。楽しみにしててください」

深山 「うん、じゃあね。また明日」  
加瀬 「はい。おやすみです」

ニヤニヤしながら電話を切る加瀬  
ニヤニヤしながら椅子に座っている加瀬

#### バイト先の映画館

加瀬 「だって三時間だよ？三時間もただだべってるだけってさ」  
中田 「わかったから。もう」  
加瀬 「もう最高。いやあ、かわいかったあ」  
中田 「嬉しそう」  
加瀬 「もうほんと嬉しい」  
中田 「いいね」  
加瀬 「なんかごめんね。僕だけなんかこんな感じで」  
中田 「もうほんとだよ。できればあんま聞きたくないな」  
加瀬 「ごめんよごめん」  
中田 「まあじゃあ、許す」  
加瀬 「やった。あそういえばさ、二人でデートとか誘おうかなとか思ってるんだけどどう？」  
中田 「あーでもいけるんじゃない？この感じだったら」  
加瀬 「だよね。でも、もうちょっと後の方がいいかな？」  
中田 「いやでも大丈夫じゃない？」  
加瀬 「大丈夫か。今日明日ぐらいに誘おうかな？じゃあ」  
中田 「うん、いいと思う」

スマホでラインを開いている加瀬

ラインの文を何度か修正する加瀬

加瀬のライン  
(よかったら休みの日二人でどこか遊びに行きませんか?)

返信を待つ加瀬

返信が来てスマホを見る加瀬

深山のライン  
(二人で?)

少し返信に時間をかける加瀬

加瀬のライン  
(はい！嬉しいですかね?)

深山のライン  
(んー、友達とかも誘おうよ！その方が楽しいだろうし)

落胆する加瀬

加瀬の日記  
(いつもこうなる。僕の人生はこんなことばかりだったし、もう自分で飽き飽きするほどだ)

日記を書く加瀬

加瀬の日記  
(ああ、また孤独が襲ってくる。なにか孤独を解消できるものを)  
頭を抱える加瀬

朝目覚める加瀬

少しベッドでごろごろしたあと、パソコンの前へ行く加瀬

パソコンを使ってラブドールと女性ものの服、好みのウィッグを購入する加瀬

それらが届くまで学校とバイトを休む加瀬

服が届き玄関へ取りに行く

どの組み合わせがいいか選ぶ

一番いいと思った組み合わせをハンガーに掛けてクローゼットにしまう

残りの服をたたんでダンスの中へしまう

ラブドールが届き玄関へ取りに行く

箱を開封し質感などを確かめる

服を着せ、ウィッグをつけて椅子に座らせる

加瀬はその隣の席に座る

加瀬  
「ねえ、見てよこれ。どう？いやさ、このままだったら絶対付き合え  
ると思ったのにさ、ね？いやほんとどこがダメだったのかな？だっ  
てさ、お昼一緒に食べに行つて、電話もあんな長い時間してだよ？  
いやあほんとなんか、女運がないって言うかさ、まあ多分僕が悪か



ったんだらうけどね。うん、たぶん僕が先輩の気を引けなかった、それがダメだったんだよ。いや、分かってたけどね。でもなんかこの感じだとやっぱ期待しちゃうじゃん、少しはさ。いや少しじゃなかったと思うけど。少しじゃなかったな、結構だなあ。あの感じは。うん。でもでもさ」

首をかしげる加瀬

ラブドールをクローゼットの中へしまう

大学内

遠くにいる深山を見つけ、避けるように逃げる加瀬

バイト先の映画館

中田 「そっか」

加瀬 「そう。いや、いけると思ったんだけどね。今回は」

中田 「うん。私も思ってた」

加瀬 「でしょ。やっぱ僕魅力ないかな？」

中田 「いや、そんなこと無いと思うよ。優しいし」

加瀬 「でもなんかさ、優しいだけだとダメってきくよ」

中田 「いや、やさしいだけじゃないよ」

加瀬 「そう？」

中田 「うん。いや、なんか」

中田 「二人でどっか行く？」

加瀬 「え？二人で？」

中田 「うん。話聞くとよ」

加瀬 「いややめてよ。いいよ、そんな気を使ってもらわなくて」

中田 「そう？いやでもいいよ、私は。行こう？」

加瀬 「そっか。じゃあいつ行く？」

中田 「日曜は？何か予定ある？」

加瀬 「ううん、なにも」

中田 「なら日曜にしよう」

加瀬 「うん。でもどこ行く？」

中田 「どこでもいいよ」

加瀬 「そうか。映画とか？」

中田 「ああ、いいけど。あんま話せたくない？」

加瀬 「まあ確かに」

中田 「何か色々話できるようなとこにしようよ」

加瀬 「話できるところか」

中田 「ナガシマとかどう？」

加瀬 「ああいいんじゃない？でも僕ジェットコースターとか苦手だからな」

中田 「まあじゃアジェットコースター以外のいっぱい乗ろう」

加瀬 「ああまあそれなら」

中田 「じゃあそうしよう」

加瀬 「うん。じゃあチケットとつとくよ」

中田 「あ、ありがとう。集合何時ぐらいにする？」

加瀬 「十時とかでいいんじゃない？駅のとこで」

中田 「ああ、そうしよっか」

加瀬 「じゃあまたチケットとかとったら連絡するわ」

中田 「うん」

#### 家の中

少しニヤニヤしながら椅子に座っている加瀬

#### 駅前

先に来ていた加瀬のところへ行く中田

中田 「あ、ごめん待った？」

加瀬 「ううん。行こう」

中田 「うん」

駅構内へ入っていく二人

ナガシマスパークランド内

ナガシマの中へ入る二人

中田 「最初どれ乗る？」

加瀬 「んーどうしようね」

そう言いながら地図を広げる

中田 「あ、これこれ。これ乗りたい」

そう言い、地図の中にある白鯨を指す

加瀬 「えー。これ相当なやつじゃん」

中田 「いいじゃん、いいじゃん。楽しそうだよ。ほらあれ」

白鯨レールがあるの方を指す

加瀬 「いや、無理だよ。絶対」

中田

「じゃあ、ちょっと見るだけ」

満面の笑みで加瀬を見つめる中田

にやけてしまう加瀬

加瀬

「んー、もうじゃあわかった。見るだけね。見るだけ」

中田

「やったー」

白鯨へ向かう

加瀬

「高いね」

中田

「高いね」

加瀬

「これは難しそうだよ」

中田

「並ぼっか」

加瀬

「え？やだよ」

中田

「えーでもせっかくここまで来たんだしさ」

加瀬

「んん」

中田

「もうね、それだから彼女できないの」

加瀬

「ええ、じゃあ分かったよ。一回だけね」

中田

「やったー」

白鯨に乗り終わった二人

加瀬

「いやあきつい」

中田

「ええそう？楽しくなかった？」

加瀬

「いやあ」

中田

「もう一回乗る？」

昼ご飯を一緒に食べる二人

加瀬

「それおいしそうだね」

中田

「ほしいの？」

加瀬

「いや別にそういうことじゃないけど」

中田

「いいよ、一口ぐらいだったら」

加瀬

「え、ほんとに？」

中田

「うん。はい」

自分の箸（スプーン）で差し出す中田

加瀬

「え」

それを食べる加瀬

中田

「おいしいでしょ？」

加瀬

「うん」

中田

「なに？どうしたの？」

加瀬 「いや、別に」  
中田 「慣れてなさ過ぎだよ」  
加瀬 「急すぎだよ」  
中田 「そう？」

微笑む中田

湯あみの島内

夜ご飯を食べる二人

加瀬 「そういえば何で今日誘ってくれたの？」  
中田 「え？ いや別に、暇だしさ。慰安旅行みたいなこと」  
加瀬 「ああそう」  
中田 「それに、まだバイト以外であったことほとんど無かったしさ」  
加瀬 「そうだったっけ？」  
中田 「うん。あんまりない」  
加瀬 「そっか」

駅前

加瀬 「夜遅いから気をつけてね」  
中田 「ありがとう。じゃあね」  
加瀬 「うん。じゃあね」  
イヤホンをつけて空洞ですを聴く加瀬

家の中

ニヤニヤしながら空洞ですの歌詞をノートに書く加瀬

中田にラインを送る

加瀬のライン (今日ありがとね。楽しかった)  
中田のライン (こちらこそありがと！また行こうね)  
にやける加瀬  
加瀬のライン (うん、行こう)

就寝する加瀬

バイト先

中田 「ありがとね。この間」  
加瀬 「ううん。こちらこそだよ。楽しかった」

中田 「ていうか、ジェットコースター怖がりすぎだよ」  
加瀬 「えーそう？でも怖いもん」  
中田 「ああそう。かわいいね」  
加瀬 「え？」  
中田 「照れてる？」  
加瀬 「いや、うん」  
中田 「じゃあね」  
加瀬 「え。うん、じゃあね」

笑う中田

家の中

ゆっくりしている加瀬

中田から電話がかかってくる

電話に出る

加瀬 「どうしたの？」  
中田 「え？いや、なんとなく話したいなって思って」  
加瀬 「えーなにそれ」  
中田 「いいじゃん。話そうよ」  
加瀬 「じゃあいいよ。でも何話す？」  
中田 「何話そうね」  
加瀬 「決めといてよ」  
中田 「えー、じゃあなんか、好きな映画とか」  
加瀬 「あ、いいね」

加瀬の日記

(何か凄く、今が凄く、自分の人生の転換期であるような気がする)

バイト先

加瀬 「今度二人でどこか行かない？」  
中田 「いいよ。どこ行く？」  
加瀬 「んー特に決めてないけど。何か適当にぶらぶら」  
中田 「ああいいね。日曜でいい？」  
加瀬 「いいよ」

公園前

中田 「先に来ていた加瀬のところへ向かう中田」  
「あ、ごめん。待った？」

加瀬 「ううん、全然。色々ね、調べてきたよ」  
中田 「あ、ほんと？ありがとう」

道を歩いている途中

中田 「なんか変じゃない？」  
加瀬 「そう？」  
中田 「うん。なんか」  
加瀬 「ああほんと？ならごめん」  
中田 「いや別にいいけど」

帰りの駅

帰ろうとする中田

中田 「じゃあね。楽しかったよ。なんかちよっと変なの気になったけど」  
加瀬 「いやそれだけどね」  
中田 「何？」  
加瀬 「いやさ」

もじもじする加瀬

中田 「どうしたの？」  
加瀬 「付き合っってほしい。好きだから」  
中田 「いいよ」  
加瀬 「え？」  
中田 「私も好きだもん」  
加瀬 「え、ほんとに？」  
中田 「気づかなかった？」  
加瀬 「うん。全く」  
中田 「鈍感だね」  
加瀬 「知ってるでしょ」  
中田 「まあね」  
加瀬 「ほんとにいいの？」  
中田 「いいって」  
加瀬 「ああそう。ありがとう」  
中田 「そんな感謝することじゃないよ」  
加瀬 「そう？でも嬉しいもん」  
中田 「それは良かった。私も嬉しいよ」

笑い合う二人

「じゃあ、じゃあね」



深山 「ね」  
加瀬 「あ、じゃあ僕もう行きますね。ちょっと今日ギリギリで」  
深山 「ああほんと。そしたらじゃあね」  
加瀬 「はい。また会えたら嬉しいです」  
深山 「うん。こちらこそ」

二ヶ月後

バイトの休憩中

加瀬 「ああ、そうなんだ」  
中田 「うん。らしいよ。あ、そういえばさ」  
加瀬 「うん？」  
中田 「今日泊まってるいい？」  
加瀬 「え？うん。いいよ。狭いけどいい？」  
中田 「お、やった。全然」  
加瀬 「あ、ほんと。じゃあ、今日一緒に帰る？」  
中田 「うん。そうしよう」

加瀬の家

家の中に入る二人

中田 「おじゃまします」  
加瀬 「うん」

中の方へ入っていく二人

中田 「綺麗だね」  
加瀬 「そう？」  
中田 「うん」  
加瀬 「座ってよ」  
中田 「あ、ありがとう」

ソファに二人で座る

加瀬 「なんか食べる？」  
中田 「あ、そうだね。何か作ろっか？」  
加瀬 「いいよ。作るわ」  
中田 「あ、ほんと？じゃあ二人で作ろうよ」  
加瀬 「ああ、そうだね。なにしようか」  
中田 「冷蔵庫なんかある？」  
加瀬 「あったと思うよ。見てみようか」



中田 「ああそうだね」

冷蔵庫を開ける

加瀬 「豚の細切れがあるね」

中田 「うん。あ、もも肉あるじゃん」

加瀬 「ああそうだ。唐揚げ作るうと思って買ったんだよ」

中田 「じゃあ、唐揚げにする？」

加瀬 「でもあれ漬けとかなないとダメじゃない？」

中田 「ああ、そうか。野菜室何ある？」

加瀬 「ああ、野菜室？」

野菜室を開ける

中田 「あ、にんじん。あと、玉葱とジャガイモとルーだね」

加瀬 「カレー？」

中田 「うん。嫌い？」

加瀬 「ううん。好きだよ」

中田 「よかった。ある？」

加瀬 「えっとどうだっけ？」

あるか確認する加瀬

加瀬 「あ、ジャガイモは何個もあった。あ、玉葱も。ルーがないな」

中田 「ああそっか。買ってくる？」

加瀬 「まあ、なんかもうカレーの口になってるしね」

中田 「確かにね。じゃあ行こっか。スーパー近くにある？」

加瀬 「ああ、あるよ。案内する」

中田 「うんありがとう」

家を出る二人

スーパーに入る二人

加瀬 カレールーが売っているところまで行く二人

中田 「いつも何使っている？」

加瀬 「私バーモントカレーかな？」

中田 「ああそう。じゃあバーモントカレーでいいか」

加瀬 「そうだね。辛さ何にする？」

中田 「中辛でいいんじゃない？」

加瀬 「そうしよっか」

レジに通す

帰ってくる二人

中田 「よし。じゃあ作ろうか」

加瀬 「うん。そうだね」

中田 「んーじゃあ、とりあえず野菜切ろう」

加瀬 「うん。でも狭くない？」

中田 「あーまあ」

加瀬 「じゃあなんか一個一個交代でやるとかどう？」

中田 「えーめんどうかいよ」

加瀬 「そうか」

中田 「じゃあ、私野菜全部切るから、それ以降のことやって」

加瀬 「うん。分かった。待ってる」

中田 「うん」

野菜を切り始める中田

それを眺めている加瀬

中田 「なに？」

加瀬 「いや、見てるだけだよ」

中田 「ああそう？何かテレビとかでも見てきたら？」

加瀬 「いや、でもなんか見たい」

中田 「なにそれ」

加瀬 「なんだろうね」

野菜とお肉を切り終わった中田

中田 「よし、切り終わったよ。あとよろしく」

加瀬 「うん」

切ったものを鍋の中に入れ、炒める

それを眺める中田

加瀬 「やっぱなんか見られてると恥ずかしいね」

中田 「でしょ？」

加瀬 「うん。なんか初めての感覚」

中田 「そっか。ていうかちゃんと見てないと。焦げるよ」

加瀬 「ああ、そうだね。ちゃんと見てないと」

加瀬 「うん」

カレーを盛り付ける

加瀬 「おお、おいしそう」

中田 「だね。これはおいしいよ」

加瀬 「よし持ってこよう」

中田

「そうだね」

加瀬

カレーをテーブルまで運ぶ二人

中田

「いただきます」

加瀬

「いただきます」

中田

カレーを食べ始める加瀬

加瀬

「うん。おいしいね」

中田

「うん。おいしいね。おかわりしよう」

加瀬

「そうだね。ていうかもうこんな時間じゃん」

中田

「あ、本当だ」

中田

カレーを食べ終わった二人

加瀬

「ごちそうさまでした」

中田

「ごちそうさま」

加瀬

「お風呂行ってまだたまってないよね？」

中田

「ああ、そうだ、まだだ。食べてるうちにためとけばよかったな」

加瀬

「だね。洗った？」

中田

「ああ、まだ。洗ってくるわ」

加瀬

「ああほんと？じゃあ待ってる」

中田

「うん」

加瀬

お風呂場に行く加瀬

中田

テレビをつける中田

加瀬

お風呂場から戻ってきた加瀬

中田

「洗ってきたよ。今もうため始めてる」

加瀬

「お、ありがとう」

中田

「これ好きなの？」

加瀬

テレビに映るラヴィットを指さして言う

中田

「ああ、ごめんね。勝手に。これ好きなの。ずっと見てる」

加瀬

「面白いもんね。どの曜日が好き？」

中田

「ああ、どの曜日だろう。難しいね。亮介は？」

加瀬

「あー。でも木曜かな」

中田

「ああ木曜ね。ニューヨーク？」

加瀬

「そうそう。好きなの。ニューヨーク」

中田

「面白いもんね」

加瀬

「そう。めちゃくちゃ好き」

中田

「あーでも私は水曜かな？」

加瀬 「えーなんで？見取り図？」

中田 「うん、そう。私 YouTubeとかも結構見てるもん」

加瀬 「あー面白いよね」

中田 「あ、見てる？」

加瀬 「うん。たまにおすすめに流れてきたりしたら見てる」

中田 「なんか眠くなってきた」

加瀬 「ね。ベッド使う？」

中田 「いい？でも亮介どこで寝るの？」

加瀬 「まあ、ソファで寝るよ」

中田 「ああ、そう。一緒にベッドで寝ようよ」

加瀬 「え？いいの？」

キスをする中田

啞然とする加瀬

中田 「いいよ」

中田 「中田を抱きしめる加瀬

中田 「苦しいよ」

加瀬 「うん。ごめん」

浮ついた表情をする加瀬

事後

狭いベッドで窮屈そうに裸のまま寄り添い合う二人

中田 「ねえ、なんで私のこと好きなの？」

加瀬 「何で？なんでか。乗せられたんだよ」

中田 「え？私に？」

加瀬 「うん。だから何でかはあんま考えたことない」

中田 「えーなにそれ」

加瀬 「でも、優しいからだよ」

中田 「ああそう？」

加瀬 「うん。だから乗せられたんだよ」

中田 「そっか。あんまよくわかんないな」

加瀬 「じゃあ、なんで萌は僕のこと好きなの？」

中田 「え、そんなの上げたらきりないよ」

加瀬 「あ、そう？嬉しい」

中田 「でもやっぱなんか、かわいいからかな？」

加瀬 「え、どこが？」

中田 「なんだろう。色々かな？」  
加瀬 「なにそれ」  
中田 「うん。いやでも、色々かわいいの」  
加瀬 「ああ、そっか。ありがとう」

翌朝九時半

目を覚ます中田

スマホを開いて時間を確認する

加瀬を起こす

中田 「ねえ、もうこんな時間だよ。大学行かないと」  
加瀬 「え？うわ、ほんとだ」  
中田 少し考える加瀬  
加瀬 「まあ一日ぐらいいいっか。休もう？」  
中田 「そうしよっか」  
加瀬 「そうしようよ。映画とか見ようよ。うちで」  
中田 「あ、いいね。そうしよう」

一日家の中で楽しむ二人

中田 「ちよつとトイレ行ってくるね」  
加瀬 「あ、うん」

スマホを置いたままトイレに行く中田

そのスマホに「まさと 今度はどこ行く？」とのラインが来る  
動揺する加瀬

少し気持ちを落ち着かせようと努力する

トイレを流す音がする

一度深呼吸をする

加瀬 トイレから戻ってきた中田が加瀬の隣に再び座る  
中田 「今日何時に帰る？」  
加瀬 「え？んーじゃあ、まああと一時間ぐらいいいようかな」  
中田 「あ、そう」  
加瀬 「え？なに？」  
中田 「いや、別に」

家の玄関

中田 「じゃあね。ありがとう。楽しかった」

加瀬 「うん。僕も」

中田 「またうちにも来てよ」

加瀬 「ありがとう。じゃあね」

中田 「うん」

中田が出て行き、玄関が閉まる

その場に座り込んで頭を抱える

家の中を歩き回る

ベッドに座り込み頭を抱える

クローゼットに向かつていく

クローゼットの中に入ったラブドールを取り出す

ラブドールをソファの隣に座らせ、話そうとするが言葉が出てこない

何かを思いつく

パソコンで調べ物をする

毒薬とメイク道具と女物の服を注文する

スマホに中田からのライン来る

(今日どうしたの?)

(ごめん。ちよつと体調悪くて)

(あ、そうなんだ。行った方がいい?)

(ううん。大丈夫。そんな動けないとかってほどじゃないし)

(ああ、それならよかった。お大事にね)

(ありがとう)

加瀬のライン

中田のライン

加瀬のライン

中田のライン

加瀬のライン

中田のライン

バイト先

「この間大丈夫だった?」

「うん。ごめんね。もう全然平気」

「ああ、ならよかった」

「そうだ。今日泊まる?」

「いいの?」

「うん。来る?」

「ああ、じゃあ行こうかな?」

中田

加瀬

家の中に入る二人

「おじゃまします」

「もう大丈夫だよ」

中田

加瀬

中田 「ああ、ほんと？」  
加瀬 「うん」

ソファに座る二人

加瀬 「今日カレーにしない？」  
中田 「また？」  
加瀬 「いいじゃん」  
中田 「まあ」  
加瀬 「じゃあさ、前みたいに野菜とお肉切ってよ」  
中田 「うん。わかった」

野菜と肉を切り終わる

加瀬 「あとやるわ」  
中田 「うん」

野菜と肉を鍋に入れ、炒める

水を入れ煮込む

カレールーを入れる

加瀬 「あ、お風呂まだだ」  
中田 「洗ってこようか？」  
加瀬 「いい？」  
中田 「うん」  
加瀬 「ありがとう。じゃあ僕これやってるわ」  
中田 「うん。オッケー」

お風呂へ向かう中田

自分の分だけ先に盛り付ける

残ったカレーに、買っておいた毒薬を入れる

よく混ぜて盛り付ける

テーブルまで持って行き、並べる

お風呂場から戻ってくる中田

もう食べ始めている加瀬

中田 「あ、はいよ」  
加瀬 「ごめんごめん。結構時間かけてたからさ」  
中田 「自分の皿の前で座る中田」  
加瀬 「あ、ごめん。ちょっとトイレ行ってくる」  
中田 「うん」

トイレへ向かう加瀬

トイレの中でイヤホンをする

星になれたを聴く

星になれたが終わるタイミングでイヤホンを外しトイレから出る

中田の元へ向かう途中、イヤホンを床に放り投げる

カレーに顔を突っ込んで死んでいる中田

その顔を持ち上げて綺麗に拭く

もう一度ちゃんとメイクを、スマホを見ながら施す

できたところで、中田にキスをする

加瀬

「ねえ。綺麗だよ、凄く。うん。ほんとだよ。そうだ。なんで好きか教えてあげようか？そんなこと言わずにさ。知りたがってたじゃん。あのね、全部、ちゃんと認めてくれそうだったんだよ。僕のさ、汚い部分とか、あまり他人に見せたくないようなところとか。そういうの全部、なんか、肯定してくれそうだったんだよ。唯一だよ。だからね、本音を話せそうだったんだよ。何でも話せそうだったんだよ。うん。分かってたよ、それは。だから怖くてさ。結局ね。でも、そんな気がしたのは初めてだったから。希望を持ったの。それが好きっていうことだったんだよ。たまたま、その時期の僕にとっては。それから抜け出せなかったな。まあ今もか」

朝の支度をする加瀬

玄関のドアを閉める

電車の中

カップルのことは気にならない

大学の最寄り駅に着く電車

駅から道

電車から降りる加瀬

階段を登り改札を出る加瀬

加瀬の日記

(僕は孤独だった。今は家に彼女がいる。なんでも話せる彼女が。それが僕を救ってくれた。確実に)